

CONTENTS

- | | | |
|---|-----------------|------------------------|
| 1 | メッセージ | 設立20周年を迎えて PREX会長 井上義國 |
| 2 | PREX設立20周年記念特集 | 途上国と関西の発展にむけた20年のあゆみ |
| 4 | ニュース&レポート | アジア各国での太陽光発電の普及を促進 |
| 5 | ニュース&レポート | 研修参加者同士のつながりの輪を広げて |
| 6 | ニュース&レポート | 日本への食品輸出を目指して一致団結 |
| 7 | 協力企業特集 | 東光機材(株)／ゴウダ(株)／大力鉄工(株) |
| 8 | PREX設立20周年記念コラム | 日本が忘れられない研修員 |
| | PREXだより | 事務局ニュース、5月実施の研修 |

メッセージ

設立20周年を迎えて PREX会長 井上 義國

財団法人太平洋人材交流センター(PREX)は本年4月、設立20周年を迎えました。この間、わが国のODAを活用して途上国の人材育成協力、なかでも中堅マネージャーの育成を重点に活動してまいりました。20年間の研修参加者は13,000人を超え、研修対象国・地域は126に達しました。

PREXは、研修事業によって途上国の発展に役立ったのみならず、途上国の人々と関西の人々の相互理解の促進、人的交流の活発化にも力を注いできました。アジア・太平洋地域を中心とする途上国の人々が研修のために関西を訪れ、企業経営者や経済団体、政府機関、自治体、大学などの皆様との交流を積み重ね相互理解を深めました。帰国した研修員の同窓会もアジア、中米など13の国と地域に結成され緊密に連絡をとりあっております。

PREXの長年に亘る活動の成果に対し、平成20年2月には「関西財界セミナー2008特別賞」を、平成20年7月には「平成20年度外務大臣表彰」と栄えある賞を受賞しました。これは、ひとえに、関西の企業、政府関係機関、自治体、学界、経済団体など関係各位の多大なるご支援、ご協力の賜であり、厚くお礼申し上げます。さらに、これまでPREXの活動に携ってこられた諸先輩のご努力に対し深甚なる敬意を表します。

PREXは、この20年間、貴重な人的ネットワークを構築しながら途上国の人材育成に必要なノウハウを蓄積し進化してきました。しかしながらPREXを取巻く環境は、これまでと同様に変化し続けるものと予想されます。過去の経験だけに頼ることなく、時代の変化に対応した新たな取組みにチャレンジしていきます。環境問題など時代の要請に対応したテーマの人材育成支援や、将来の中堅マネージャー候補である在日外国人留学生の育成支援にも取り組んでまいります。

今後、世界経済の発展にとっても日本経済の成長にとってもアジア・太平洋地域の途上国の人材育成支援はますます重要になります。PREXは引き続き、途上国の中堅マネージャー育成支援と、研修事業を通じて関西のグローバルな人的交流の活発化と相互理解の促進を図るという基本理念のもとに活動を展開していきます。

その結果、PREXが途上国にとって、また関西にとって、なくなつては困る、なくてはならない存在になることをめざし、職員一丸となって努力する所存です。関係各位の引き続きのご支援、ご協力をお願い申し上げます。



'90 設立披露パーティにて
(井上現会長、神田前会長、
山田初代理事長他)。



'91 マレーシアにおける
PREX初の海外研修の
開講式。



'98 ODA資金を活用した初の
遠隔研修を実施。大阪、
タイ、インドネシアを結んだ。



'08 高村外務大臣(当時)より
外務大臣表彰を授与される
井上会長。

途上国と関西の発展にむけた20年のあゆみ

PREXは、関西経済人の高い志と地域発展への熱い思いと関西の産学官の総意と協力により、1990年4月大阪に設立されました。これまで20年間に延べ462コースの研修を実施し、研修事業を通じてアジアを中心に欧州、中東、アフリカ、中南米、大洋州などの人々との人的交流、相互理解の促進に努めてきました。関係各位のご支援、ご協力により途上国の人材育成機関、国際的人的交流促進機関としての基盤強化にも着実に取り組んでまいりました。

20年間で 築き上げてきた 活動基盤

1 産業振興分野での経験・ノウハウの蓄積と総合調整力の向上

PREXは設立以来、民間団体としての柔軟性を生かし、民間企業、政府関係機関、地方自治体、国際協力団体などと連携、協力を図りつつ、途上国の社会、経済の発展に貢献することを目的に、長年に亘り、産業振興分野の研修を実施し、ノウハウの蓄積と総合調整力の向上に努めてきました。テーマは、経営管理、輸出促進・マーケティング、中小企業振興、環境、観光振興・地域振興などです。研修の企画提案を積極的に行い、外部資金を活用した研修事業を拡充してきています。

2 国際的人的ネットワークの構築

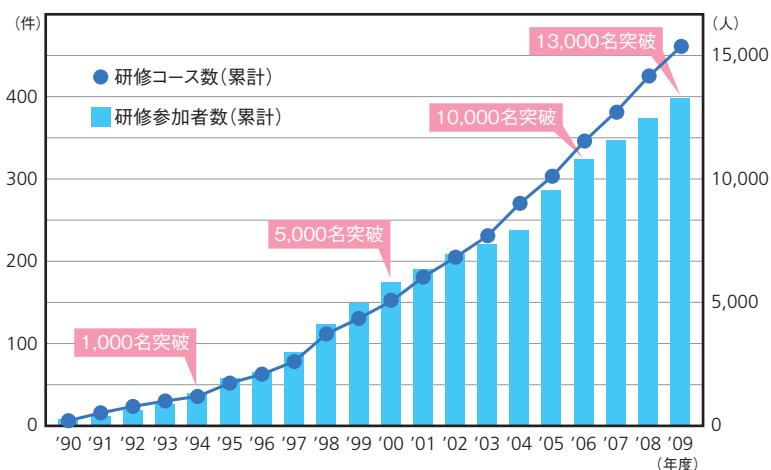
研修参加国数は126カ国・地域、同窓会は13カ国・地域2,200名超となりました。世界各地に広がる研修員、現地関係機関とのネットワークはPREXの財産となっています。

現在、PREX同窓会は、シンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイ、ベトナム、中国、重慶、中央アジア、モンゴル、メキシコ、ミャンマー、ラオスの13の国・地域に設立されています。各同窓会での会員間の交流に加え、PREXも支援・協力し、計画的にフォローアップ活動を行い、人的ネットワークの維持、強化に努めています。各同窓会会員をはじめ帰国研修員の中には、各界の指導者的立場で活躍している方も多くなってきています。海外研修の企画・実施、現地研修ニーズの把握などのために、現地協力機関の開拓と連携強化の取組みも行なっています。

3 関西の産学官との幅広い接点と協力関係

PREXの運営基盤である基本財産33億9,300万円の80%は関西の民間企業97社から、20%は6自治体から寄付された浄財です。PREXの役員構成は、関西の産学官をあげての体制となっており事業運営面においてもご支援、ご協力を頂いています。設立以来、事務局陣容の半数は、関西の主要企業から手弁当で派遣いただいている現役の幹部社員、中堅社員です。この20年間、19社から71名の出向者を派遣頂いています。PREXでは、基本財産の運用収入でプロパー職員の人件費、事務所賃借料など事務局運営経費を賄っています。研修・交流事業は、先方からの要請、あるいは、当方からの企画・提案によりODA関係機関、国の関係機関、経済団体、海外関係機関などから受託し、外部機関の資金を導入して実施して

PREX研修コースと参加者の推移

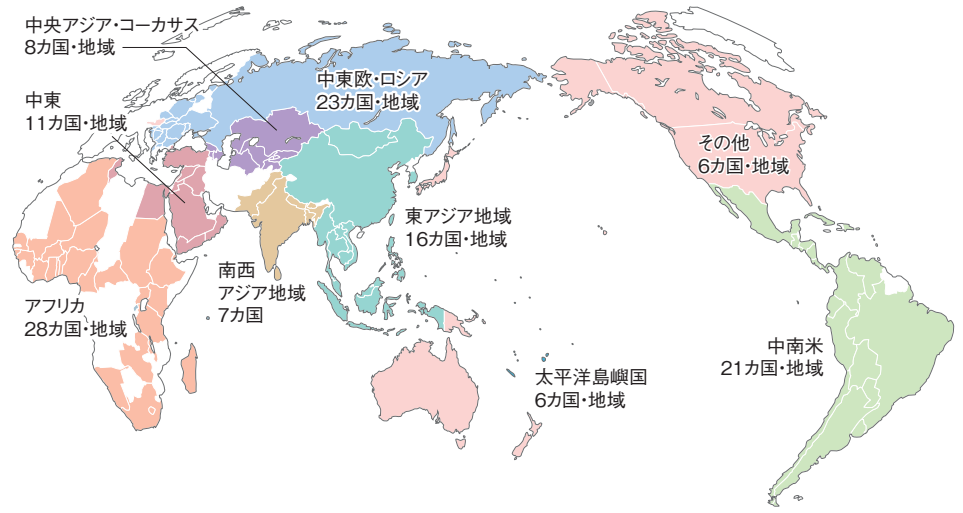


PREXは、1990年4月設立以降、途上国の人材育成支援事業と、その活動を通して国際的人的交流の活性化、相互理解促進に努めています。2010年3月まで、延べ462コースの研修を実施し、研修参加者累計は、126カ国・地域、13,138名(受入・訪日)研修4,096名+海外研修9,042名)となっています。

PREX研修参加者による同窓会組織



PREX研修参加者の国・地域別実績



います。PREXは設立以来現在まで、国・自治体からの運営補助金の支援は受けていません。また賛助会員制度はとっておらず、会費収入もありません。

4 豊富な経験・ノウハウと国際協力への熱意ある講師、専門家陣

PREXでは、設立以来20年間に、企業経営、中小企業振興、輸出促進・マーケティング、環境、地域振興・観光振興など産業振興分野での豊富な経験・ノウハウと国際協力に対する熱意を持った総勢約500名の講師・専門家との強いネットワークを構築してきました。2004年2月から企業などでの豊富な経験・ノウハウと国際協力に対する熱意を持ったシニアの方々に、講師・専門家として協力を得るために「PREXシニア専門家制度」を創設し、74名に登録頂いています。また、PREX出向者OBを中心に、研修のコースリーダーとして研修の企画・運営にもご協力頂いています。

5 関西と途上国の交流と相互理解の促進

PREXの研修に協力いただく企業・団体数は年間約300です。PREXでは、研修事業を通じて研修の支援・協力者との双方向の交流に努めています。研修参加者をパネリストとした一般公開セミナーや研修カリキュラムに関西の特色をアピールする「関西プログラム」も組み込んでいます。2004年度からは関西の国際交流団体と連携し、日本人家庭への半日程度のホームビジットも実施しています。協力頂く皆様、帰国研修員には、機関紙「PREX NOW」日本語版(年10回)、英語版(年4回)、中国語版(年2回)を発行し、継続的な情報提供を行っています。

PREX小史

1984年	● 関西経済同友会が太平洋諸国に調査団を派遣 ● 「今後のわが国の国際協力の重点を人材養成におくべきこと」を提言し、「経営と技術の交流センター」構想を発表
1988年	● 第6回太平洋経済協力会議(PECC)大阪総会で、宇野関経連会長が、関西の産・官・学の代表としてアジア・太平洋地域の人づくり協力のための組織を大阪に設立することを提案 ● 設立準備委員会ならびに幹事会を設立
1989年	● 関西経済連合会がアセアン諸国へ現地ニーズ調査団を派遣 ● 関西経済連合会事務局内に設立準備室を設置
1990年	● 外務・通商産業省両大臣の認可を得て発足。会長：宇野収、理事長：山田稔、副理事長：神田延祐が就任。 ● 太平洋経済展望(PEO)日本委員会への助成開始 ● 機関紙「PREX NOW」日本語版創刊
1991年	機関紙「PREX NOW」英語版創刊
1992年	シンガポール、マレーシア、インドネシアにPREX同窓会設立
1994年	● 宇野会長、山田理事長退任。会長：神田延祐、理事長：井上義國、副理事長：柴田稔が就任。 ● ベトナムにPREX同窓会設立 ● 機関紙「PREX NOW」中国語版創刊
1995年	PREX設立5周年記念事業実施
1996年	ホームページ開設
2000年	● 中国、重慶、中央アジアにPREX同窓会設立 ● PREX10周年記念事業実施
2001年	● 神田会長退任、顧問に就任。会長：井上義國、理事長：柴田稔、副理事長：藤洋作が就任。 ● モンゴルにPREX同窓会設立
2003年	大阪市北区中之島センタービルから、大阪市港区築港 pia NPOに事務所移転
2004年	メキシコにPREX同窓会設立
2005年	● PREX設立15周年記念事業実施 ● ミャンマーにPREX同窓会設立
2007年	ラオスにPREX同窓会設立
2008年	関西財界セミナー特別賞受賞、外務大臣表彰受賞



海外で開催するセミナーは、帰国研修員やカウンターパートからの情報を得て現地でニーズの高いテーマで実施しています。現地を訪問すると多くの同窓生が集まり、その多くは経済団体や企業の幹部として活躍しています。(2009年度ベトナム海外研修)



研修では関西の優れた企業の経営者に経営理念や組織マネジメントについてお話を伺います。研修参加者は日本のモノづくりの技と管理手法、情熱を目の当たりにして深い感銘を受け、母国の発展に向けた決意を胸に帰国しています。

アジア各国での太陽光発電の普及を促進



受入研修 環境

太陽光発電導入のための基礎研修

太陽光はクリーンで再生可能なエネルギーとして世界的に大きな期待が寄せられています。関西には、太陽光パネルや住宅へのパネル設置を行なうハウスメーカーが集積しており、研修を行うには最適の場所と言えます。研修には、アジア地域9カ国（インドネシア、ラオス、モンゴル、ネパール、パキスタン、フィリピン、スリランカ、東チモール、ベトナム）から18名の研修員が参加しました。研修の最初には、ワークショップを開催し、研修員から各国での太陽光発電の状況等を報告していただくとともに、関係者との交流を図りました。

ワークショップでは、各国の代表からエネルギー状況、再生可能エネルギー状況、発電状況等について報告。関係者42名の参加を得ました。

日本の太陽光発電の発展過程と現状

研修の最初に吉野コンサルタント事務所の吉野量夫氏から、1974年のサンシャイン計画以前の創成期から現在に至るまでの政府の政策を中心に講義していただきました。日本では、2005年までは、太陽光発電の累積導入量、パネルの製造量ともに世界第1位でしたが、2005年に政府の補助金制度が無くなり、2008年には累積導入量ではドイツ、スペインに次いで第3位、パネル製造量では中国に抜かれて世界第2位になりました。しかし、昨年には日本でも補助金制度が復活し、余剰電力の買取価格が従来の2倍の48円/Kwhとなったことで、太陽光発電設備は10数年で元が取れることになり、今後飛躍的に増大することが期待されています。

アジア各国での太陽光発電の現状

日本に住んでいると電気があるのが当たり前と考えがちですが、世界人口68億人のうち16億人が未だに電気のない生活を強いられているのが現状です。今回研修に参加した国での電化率は、フィリピンが98%と最も高く、モンゴルが40%で最も低くなっています。電気が供給できていない理由としては、モンゴルの様に移動式住宅があること、フィリピン・インドネシアの様に多くの島があること、ネパール・東チモールの様に急峻な山岳地帯があること等様々であります。日本では1964年に電化率100%を達成し、現在太陽光発電設備の出力は既存の商用ラインに接続する系統連系方式が96%となっています。一方アジア諸国で行なわれている太陽光発電は、現在電気が供給されていない地域で発電する独立型の地方電化方式が中心となってい

ます。一例としては、ソーラーホームシステムがあり、各家庭に設置した太陽光パネルで昼間発電した電気を蓄電池に蓄え、夜間に照明に使用しています。地方電化方式では、フィリピン以外の8カ国で2,100（東チモール）～190,000（インドネシア）戸の実績があり、今後も電化率向上のために各国ではこの方式を促進する計画を立てています。フィリピンでは、2008年に再生可能エネルギー法を成立させ、再生可能エネルギーの導入促進を進めています。

研修の最後には、関係者にも参加していただき成果報告会を開催しました。研修員は、日本と母国の太陽光発電の状況が全く異なるにも拘わらず、日本の状況を未来形の一つとして観察しながら、系統連系を含めたより広い視野で太陽光発電を考え始めた様子であり、本研修は所期の目的を達成したものと思われます。

— 事務局次長 尾上 暉隆

TOPIC

太陽光ランタンをモンゴルで活用

今回は、テレビ、ラジオ、新聞等で取り上げられる機会が多く、反響の大きい研修でした。テレビでは、モンゴルの研修員ジャンバ・サウコワさんを最初のオリエンテーションから最後の閉講式まで



研修成果報告会で発表する
ジャンバ・サルコワさん。

追っていました。三洋電機を訪問した際に見た太陽光ランタン（昼間充電すれば、夜間5時間照明として使用できる）はモンゴルでも使えると話していました。成果報告会では、現在40%の電化率を2020年には100%にしたいと報告していました。

研修概要

研 修 名	太陽光発電導入のための基礎研修
実施期間	2009.2.3(水)～26(金)
研修参加者	省エネや太陽光発電に従事する行政官等18名
委託元機関	独立行政法人国際協力機構(JICA) 大阪国際センター
関係機関	関西経済連合会

お世話になった方々、企業・団体（敬称略、訪問順）：関西経済連合会、吉野量夫コンサルタント、JICA林俊行国際協力専門員、JICA新関良夫国際協力専門員、大阪市柴島浄水場、三洋電機本社、カネカ大阪工場、グランドメゾン西九条BIO、積水ハウス 総合住宅研究所納得工房、パナホーム本社他、チェンジ・エージェント、京セラ佐倉事業所、JICA本部、経済産業省、環境省、関西電力、ゴウダ、シャープ葛城工場、浜田、大阪ガスNEXT21

研修参加者同士のつながりの輪を広げて



受入研修 経営管理

シリア総合的経営管理研修

シリアでは1970年以降、国家主導の経済政策により、国営企業を中心とした産業界が形成されてきました。けれども、昨今の国際化、自由化の流れの中で、国際的に通用する高品質の製品の製造が求められています。本研修では、これらの課題解決を目指して来日するシリアの工業会議所職員および民間企業経営幹部計11名に、日本の実践的な経営管理、生産性向上についての理解を深めてもらうために実施しました。

新生紙化工業に訪問時の風景。
皆、非常に真剣に3S活動について理解を深めていました。

とにかく真面目な研修員

本研修は、PREXで3年目の実施となりました。シリアの研修員は毎年真面目な面々が揃っています。例えば、研修へ取り組む姿勢や、講義・訪問先での活発な質疑応答はもちろんのこと、毎日その日の振り返りのための自主的なディスカッションを行っていたことが挙げられます。また、他の研修と比べ、研修中の提出物を多めに課せられていましたが、全員前向きに取り組んでおられました。これらの姿勢はもちろん、彼らの熱意と勤勉さによるものですが、さらに、昨年度の参加者の活躍と応援も関係しているようでした。

昨年度研修員の力強い活躍

昨年度研修員は帰国後、活発な活動を展開しています。特に特徴的なものとして、日本で学んだ生産性向上の手法についてのセミナーの開催があります。このような活動が研修終了後一年以上続いていること自体めずらしいですが、そこへ民間企業の研修参加者がライバルの育成につながりかねないセミナーの開催に主体的に参加しているのは、特筆すべき点です。現地からの報告によると、セミナーの内容も、所属企業での帰国後の活動経験を踏まえ、改良し続けているとのこと。

昨年度研修参加者であるダマスカス工業会議所職員のレドワン氏は、今年度参加者を対象としたオリエンテーションを自主的に実施し、参加に際しての心構えなどを事前に指導してくれました。これらの後押しが、今年の研修員に良い意味でのプレッシャーを与えていたことは、彼らの言葉の端々から感じ取れました。

輪を広げて

今年度研修員は昨年度参加者の活動を意識しており、彼らの帰国後の活動計画の一部には昨年度参加者との協働が盛り込まれていました。この研修は、工業会議所の職員以外、毎年違う企業の幹部が参加しています。しかし、訪日研修を通じて、面識の無かった参加者同士がつながり合っていくことは、シリアの発展考えた時、非常に有意義なものであると感じました。

— 国際交流部 コースプランナー 折井 耶澄

TOPIC

折り鶴トレーニング

日本の折り紙は、海外でも非常に有名です。ただ、異文化に所属する彼らにとって、その習得は非常に難しく、折り鶴の折り方でさえ、訪日研修中にマスターして帰国する参加者は少ないのです。

今回機会があったので、数人の前で折り鶴の実演をして見せました。皆興味深げに見ていたのですが、一名の男性研修参加者が、その習得について非常に意欲を見せていました。その後、新幹線の中、講義終了後の数回に渡るトレーニングを経て、彼は見事、美しい鶴の作成方法を習得するに至りました。聞けば、彼は子沢山の家庭の長で、日本文化の代名詞である折り紙を、是非子供達に伝えたいと考えトレーニングに臨んでいたそうです。

女性が10代で結婚するのがめずらしくないシリアでは、子沢山の家庭が多く、家族の結びつきも非常に強いと言われています。研修参加者の折り鶴の習得はほんの一例ですが、日常の会話の中からも、「親として子供に何をしてあげられるか」ということを、普段から強く意識している研修参加者が多いような印象を受けました。



鶴の折り紙に熱心に取り組んだシリアの研修員。

研修概要

研修名	シリア総合的経営管理研修
実施期間	2010.2.8(月)～3.5(金)
研修参加者	シリアの工業会議所職員および民間企業経営幹部計11名
委託元機関	独立行政法人国際協力機構(JICA) 大阪国際センター

お世話になった方々、企業・団体(敬称略、訪問順):
吉岡シニア専門家、福田シニア専門家、岩本シニア専門家、松下幸之助歴史館、新生紙化工業、寿ダイカスト工業、東京商工会議所、平和工業、トヨタL&F、富士シート、丸十服装、伊藤工機、菱機械工業、ライオン大阪工場

日本への食品輸出を目指して一致団結



受入研修 貿易振興

中米カリブ地域・日本貿易振興のための キャパシティ・ディベロップメント研修

2010年2月15日より3月12日まで、ドミニカ共和国・コスタリカ・グアテマラ・エルサルバドル・ニカラグアの5カ国対象に「中米カリブ地域・日本貿易振興のためのキャパシティ・ディベロップメント研修」を実施しました。同研修では、輸出振興支援機関から行政官や職員が8名来日し、食品をテーマとして日本市場へ参入するために必要な知識(日本の食品市場の特徴、流通制度など)を学び、現地企業への支援プランの検討を行いました。

コースリーダーの先生方に自国のオーガニックティーについて一生懸命説明するエルサルバドルの研修員。非常に熱心な研修員が揃っていました。

新たな3ヵ年計画で実施

PREXでは2007年度から2009年度にかけて、中米カリブ地域の食品を日本市場に輸出することを目的とした研修を実施してきました。現地から研修の継続を求める声が多いことから、今年度より新たな3ヵ年計画の研修を実施することになりました。昨年度までの主な反省点として、研修の成果が次年度に活かされにくいことや、研修員が調査を行う産品が限定されていることなどが挙げられていたため、今年度から3年間を通じて研修の成果を出すことや、調査の対象となる産品を複数リストアップさせるなどの点を改善しました。

初年度は、主に基礎的な知識を学ぶことに重点を置き、訪問では物流面に重点

を置いた日程を組んでいます。日本の物流システムは非常に複雑ですが、講師や訪問先でのお話により研修終了時にはその特徴を上手く掴んでもらったと思います。

中米共同での日本市場参入

研修が進むにつれ、中米カリブ地域の各々の国で日本市場に参入すると同時に、地域の特性を生かし、各国共同で日本市場参入を目指すことも、日本の消費者に与えるインパクトが大きいのではないかと結論に至りました。そこで研修員全員でプロジェクトを立ち上げ、特徴あるブランド名や商品コンセプトを検討することを始めています。検討の結果、“GRACIA DEL SOL, CAC(太陽の恵み、中米カリブ地域)”というプロジェクト名に決まりまし

た。具体的なプロジェクトの進め方は、2年目の研修員が引き継ぎます。

研修参加者が感じたこと

今回の研修を通じて、研修参加者は、日本人の食の嗜好や日本市場の特徴を知ると同時に、日本人の中米カリブ地域に対する認知度の低さも痛感することになりました。そして、中米カリブ地域の結束の重要性に気付いたようです。来年度は、商流面に焦点を置き、中米カリブ地域の産品に対して、より具体的なアドバイスを得られるようなカリキュラム構成とするとともに、中米カリブ地域が共同で日本市場へ参入するためのプランを更に具体化していく予定です。

— 国際交流部 コースプランナー 北村 圭

TOPIC

中米カリブ地域の食品の魅力

中米カリブ地域の食品というと、皆さんはどんな食品を想像されますか。研修参加者に中米カリブ地域の食品の特徴をいくつか挙げてもらいました。一つ目は、Saludable(機能的)であるということ。豊かな自然が育まれたノニジュースなどの栄養価が高い食品は、最近日本でもよく見かけるようになりました。二つ目は、Organico(オーガニック)であること。中米カリブ諸国では、経済発展の恩恵を受けることができなかったゆえに、現在でもオーガニック栽培に適したクリーンな土壌が残っているようです。三つ目は、Exotico(エキゾチック)であること。グアテマラにはティカル遺跡などに代表されるマヤ文明の遺跡が残っており、まだ解明されてないことも多いようです。その神秘的な文化は、食事にも大きな影響を与えています。そして最後に、Sabroso(おいしい)ということ。もし、中米カリブ地域の食品を見かけられた場合には、是非お試しください!



①グアテマラのコーヒーの匂いがするはちみつ
②エルサルバドルのオーガニックノニジュース

事業概要

研 修 名	中米カリブ地域・日本貿易振興のためのキャパシティ・ディベロップメント研修
実施期間	2010.2.15(月)~3.12(金)
研修参加者	中米諸国で輸出振興に携わる行政官、もしくは輸出振興機関の職員
委託元機関	独立行政法人国際協力機構(JICA) 大阪国際センター

お世話になった方々、企業・団体(敬称略、訪問順):
食品コンサルタント 上田栄一講師、ヒューテック
西龍治社長、阪急泉南グリーンファーム、関西空港
検疫所、大阪産業大学 佐藤俊彦教授、大阪市
中央卸売市場本場、アニュー関西、ワールド
レーディング、レーブドゥシェフ、大阪検疫所、ミノル
サービス、麗澤大学 成相修教授、日本貿易振興
機構、アスク、日本チョコレート・ココア協会、バル
タ、築地卸売市場、コブこうべ、UCC上島珈琲、
グリーンヒルホテル神戸、サントリー山崎蒸溜所

協力企業特集

PREXでは、年間30件前後の研修を国内で実施し、大変多くの訪問先にご協力いただいています。その中から毎号、特色ある企業などをご紹介します。

319件

うち新規 62件

金属加工技術を 活かした福祉用具

東光機材(株)

本社＝兵庫県三木市
HP＝<http://www.tokokizai.co.jp/>

「アフリカ地域 中小零細企業の経営改善に向けた生産性向上」研修で訪問

金物の町、兵庫県三木市で建築金物などを製造する同社は、これまでの金属加工技術を活かし、異業種間連携、産官学連携によって、ユニバーサルデザインの福祉用具「踏み台」製造など、新事業展開、新製品開発に取り組んでいます。訪問当日は、企業経営者との懇談と現場の見学を通じて、連携による新製品開発について学び、アフリカの研修員は、異業種間連携の成功のカギは、Give & Give精神であることを知りました。また金具メーカーの新事業展開の軌跡を目の当たりにし、中小企業の革新性、社会に寄与する製品作りへの思いに感銘を受けました。藤田治専務からは、「私たちにとっては、アフリカについて関心を持つきっかけになった」とのお言葉を頂戴しました。



同社最初の製品である「前挽き鋸」を手に経営活動の過程を学ぶ研修員。

太陽光発電システムの 販売・施工

ゴウダ(株)

本社＝大阪府茨木市
HP＝<http://www.goda-j.co.jp/>

「太陽光発電導入のための基礎研修」で訪問

同社は、昭和46年に設立され、当初はダンボールの回収・再製からスタートし、その後建材加工、建材施工、ビジネスフォーム印刷、太陽光発電システムの販売・施工等と時代のニーズに応じて業容を拡大し、現在は社員860名で全国的に展開されています。

今回訪問した本社は、地域活性環境共生ビルとして、1階に書店、CDレンタルショップを展開し、3階には診療所等で集客を図り、4階、5階に太陽光発電の展示場を設け店頭での太陽光発電システムの販売活動を行っています。今回ご講義いただいた合田純博PV事業部長が、政府の補助金が一時的になくなった時が新たに太陽光発電事業参入のタイミングと判断したとのことは先見の明があると印象的でありました。



合田事業部長の講義風景。研修員は太陽光発電施工の際の家の強度確認方法等を質問。

鉄道車両のブレーキ 装置用機器製造 ～安全を載せて58年～

大力鉄工(株)

本社＝兵庫県神戸市東灘区

「中小企業振興政策コース(C)」で訪問

兵庫県三田市に工場を持つ同社は鉄道車両等の各種ブレーキ装置用機器の製造、産業諸機械の油圧・空圧機器、装置製造などを手掛けています。昭和27年(1952年)神戸市東灘区で創業され、今年で58年目を迎える老舗企業であり、今回、同社に中小企業振興政策コース(C)で、訪問させていただくことができました。同社は、ブレーキ部品の製造において、利用者の安全を守るための品質を厳しい目で追求しています。新幹線車両の部品も製造しており、翌日、新幹線を利用する研修参加者から様々な質問がでていました。ご案内いただいた三田工場清水副工場長からは、「各国の行政幹部を迎えて社内のモチベーションアップにつながりました」とうれいお話もいただきました。



研修参加者は三田工場を見学させていただき活発に質問をしていた。

日本が忘れられない研修員

今、私は中央アジアにいます。ウズベキスタン、キルギス、カザフスタンを訪問し、PREX同窓会のメンバーと懇親の機会を持ちました。研修員の皆さんは一緒に「日本が忘れられない、ぜひまた行きたい」と言ってくれます。

帰国後は研修で学んだ多くの知識を糧として、決して楽ではない経済環境の中でもリスクも恐れずに、自信を持って前向きにがんばっている姿には、こちらが励まされました。

研修を通じて講師や訪問先はじめ多くの方との交流があったからこそ、帰国後も関西そして日本に対する深い理解と強い思いを抱き続けられるのだと思います。

私は1991年に社会人としての第一歩をスタートし、早くも20年

目を迎えました。PREXのこれまでの歴史は私自身の成長の過程でもあり、皆様方の協力がなければPREXも私も今日を迎えることはできなかったはず。設立20周年を迎えた今、PREXの意義を関西の皆さんにも感じていただけるような活動に、積極的に取り組む必要がある、それこそがこれまでの感謝の気持ちを表すことになるのだと、決意を新たにしています。

物理的には遠くても、時間を共に過ごした人というだけで、気持ちの上での距離はずっと近く感じられます。これからもPREXの一員として、関西と途上国をつなぐ要になるような仕事をしたいと思っています。

— 国際交流部 担当部長
瀬戸口 恵美子



キルギスで帰国研修員を訪問し、研修参加後の活動や課題をインタビュー。研修参加後、自信を持ってビジネスができるようになったそうです。(右から3人目が筆者)

PREXだより

インターンシップ受け入れ

PREXでは、交流活動として留学生、日本人学生のインターンシップを年間3名程度受け入れています。立命館大学 園部さんのインターンシップ体験の感想をご紹介します。

インターンシップを体験して

2010年2月8日～3月26日 立命館大学国際関係学部 3年生 園部 由樹

PREXの一員として過ごす7週間のあいだ、様々なことを経験させて頂きました。その中で私は聴くということが出来るようになりました。注意深く耳を傾けるという意味を持つ「聴」。インターンシップは給料が発生するものではなく、大学から多少は補助が出るが通勤・研修同行に必要な費用は自己負担。これに相当するもの、いやそれ以上のものを全部持って帰ろう。これが皆さんにたくさん質問をさせてもらった私の原動力でした。それに加えて日本で貪欲に学ぼう・吸収しようとする研修員の姿や、なにかあったら気軽に聞いてというPREXの方々のスタンスが、私を大きく後押ししてくれました。研修の概要を説明してもらう時はこちらの知識不足であってもどんどん聞く。PREXの方と話す時間があれば多岐に渡って質問させていただく。このようにして私は聴く姿勢を自分のものにすることが出来たと思います。

PREXでのインターンシップを通して、人材育成・国際協力は人と人との協力の上で成り立っているということを体感したのと同じように、私がこうして成長出来たのは、周りの様々な人の協力のおかげということを改めて実感しています。



受け入れてくださったPREXの皆様、貴重な時間を割いてお話をしてくださった全ての方々に感謝を申し上げたいと思います。

中小企業振興政策コースの参加者らと園部さん(右から3番目)

PREX評議員会・理事会終了

平成21年度第2回評議員会・理事会を開催し、平成21年度収支予算修正案、平成22年度事業計画案、平成22年度収支予算案、理事・評議員選任案、最初の評議員選任方法案の審議、決議を行いました。

PREX20周年記念マークを作りました

PREXは、20周年を記念しロゴマークを作りました。ビジョンの実現にむけ未来へ躍進していきたいという思いを表現しています。



2010年5月実施の研修

受入研修 経営管理

「エチオピア品質・生産性向上改革調査」本邦研修

実施期間 2010.5.10(月)～21(金)

研修参加者 カウンターパート機関9名、企業参加者10名

委託元機関 独立行政法人国際協力機構(JICA)
大阪国際センター

受入研修 経営管理

中小企業振興のための金融・技術支援①

実施期間 2010.5.31(月)～6.25(金)

研修参加者 各国の中小企業振興担当者15名

委託元機関 独立行政法人国際協力機構(JICA)
大阪国際センター